

地球の木

♥地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- 極寒の冬をテントで過ごす被災者たち……………1
- カンボジア調査報告……………2~3
- フィリピン・ネパール・ラオス……………4~5
- ブランチから……………6
- 太陽光がつなぐ心と心……………6
- 地球の木ユースクラブに入って……………7
- ヨッコのグローバルeye……………7
- 活動報告……………7
- INFORMATION……………8

パキスタン地震救援募金ありがとうございました！

会員の皆さま、生活クラブ生協神奈川をはじめ多くの方々からたくさんの募金が寄せられ、総額は5,114,567円（2月20日現在）にのぼりました。この募金は、日本国際ボランティアセンター（JVC）がパキスタン北西辺境州バタグラム県で行う支援活動に使わせて頂きます。

このパキスタン大地震は、一昨年のスマトラ沖地震に比べるとマスコミに取り上げられる頻度も少なく、注目度も低くなっています。そんな状況の中で現地の人たちは一年で一番寒い時期を必死で乗り越えようとしています。

「支援の届きにくい人たちへ、キメの細かい支援をおこなう」というNGOならではの視点を大切に、地球の木でも引き続き現地の状況を見守っていきたいと思います。
（事務局長 筒井由紀子）



極寒の冬をテントで過ごす被災者たち

日本国際ボランティアセンター（JVC） 広瀬 哲子

昨年10月8日に発生したパキスタン大地震。7万5,000人以上が犠牲に、そして200万人以上が住居を失った。その日から3ヶ月以上が経った2006年1月。朝晩は氷点下となる寒さの中、被災者はいまだテントでの避難生活を送っている。テントの中では、地面からの冷たさが直接体に伝わってくる。土の上にはシートと薄い毛布を敷いているのみなのだ。部屋の隅に重ねた数枚の布団の上に、家族が体を寄せ合って過ごしている。

崩壊した家屋の瓦礫はまだ至る所に残っている。800人の住民の内38人もが亡くなったバタグラム行政区バザーゲイ村でも、崩れ落ちたレンガや木材が散乱している。その瓦礫の山の中で、一人の老婆が木切れを拾っていた。暖をとるための燃料にするのだという。棒状の廃材をつえ代わりにし、腰を丸めてゆっくりと木を拾い続けている。彼女の孫は、この瓦礫の下敷きになって亡くなったそうだ。生き延びた人々は、身近な人を失った悲しみを抱えながら冬に立ち向かっている。

越冬のためにトタン板を支援

この冬をいかに乗り切るか。被災者は大きな課題に直面している。政府が初期支援金として被災家庭に分配しているのは2万5千ルピー（約5万円）。春までの間、何とか家族が食べるものはまかなえそうだが、住居の修復には全く足りないと言う。パキスタン軍も被災家庭にトタン板を配布しているが、冬を越すには明らかに不十分だ。壊れた家の壁や屋根として、またテントに乗せて外気を遮るなど、汎

用性の高いトタン板だが、とにかく数が不足している。

そこで私たちは、ともに支援活動を行なっている地元NGO「SPADO（Sustainable Peace and Development Organization）」の仲間たちと話し合い、被災者にトタン板を配ることを決めた。トタン板に実際に釘を打ち、壊れた家屋を修復する作業は住民自身が担う。被災した人々の間に生まれてきている、自ら復興しようという気持ち。この兆しを支えていきたい。

トタン板は価格の前後があるものの、おおよそ1枚1,600円。地球の木の皆様、そして生活クラブ生協・神奈川の皆様から届いたサポートが、今、パキスタンの多くの家庭に暖かい空間を作り出している。



春に向けて

冷え冷えとした避難テントが並ぶ中で、ほっとした光景に出会った。テントの中に、断食明けのお祭りのためにあつらえた色鮮やかな女の子の衣装が飾ってあるのだ。家族で季節のお祭りを楽しみ、美しいものを求める気持ちは、瓦礫に囲まれた被災地でも失われていない。テントの横では、新しい服を縫うためのミシンが太陽に輝いていた。今、被災地の人々は力強く立ち上がり始めている。暖かく春を迎えることができるよう、できる限りのサポートを続けていきたい。

地球の木で集められた募金は簡易トイレの設置、トタン板と布団の配布に当てられました。

カンボジア調査報告

2005年11月19日～24日

豊かな自然と経済発展の狭間で

1992年、地球の木が自衛隊派遣市民調査団の事務局としてカンボジアにかかわってから13年が経ちます。戦争や虐殺の跡も生々しいカンボジアの地に降り立った頃のことを思うと、2005年11月のシエムリアップ空港は南国らしい空港施設を建築中で、行きかう人々もどこか浮き浮きとした楽しさにあふれているようでした。しかしながら一方では貧富の差が広がり、スラムの出現、エイズのまん延、人権侵害など問題も山積しています。今回の訪問の目的はチャイルドケア・センタープロジェクトの今後をどのように見守るかを決定するための重要な調査になりました。調査は、シエムリアップのセンターで、子どもたち4人とアシスタントマネージャーのサモン君（今年度から子どもたち全員の教育や生活の指導をしてくれる）からの聞き取りから始まりました。リーダーの子どもが、全体をまとめて勉強や豚の飼育、生活態度など自主的にスケジュールを立てて楽しく生活している様子がわかりました。

センターがなければ、親からの虐待で傷ついたり、貧困のため教育を受ける機会を失っていたことでしょう。高校生や中学生はそれぞれの個性に合ったアルバイトも始めており、いずれセンターから自立していく準備段階にありました。

2日目には、ボートで水上生活の様子、NGOるしなの重要な支援活動である漁協による違法漁業の監視などを視察しながらトンレサップ湖を横切り、バットバンを訪問しました。バットバンでは、学業が優秀な2人の高校生の生活の様子を細かく聞いてきました。私たちの支援が高等教育のチャンスを広げることに役立ち、目に見える成果となっていることを実感しました。英語の勉強には特に力を入れているようで英語で様々な質問に答えてくれる彼らに、



センターのスタッフや里子とツアーメンバー

カンボジアチーム 小泉 恵子

遅しさと生きていく輝きを見た思いがしました。バットバン近郊トロス村の私たちが建設したチャイルドケア・センターでは小学生の3人の子どもたちが笑顔で迎えてくれました。大きく茂った木々の間で建設から時がたったトロス村のセンターは、だいぶくたびれてきていました。リーダーの男の子2名は稲刈りを終えたばかりの姿で現れ、その遅い成長振りに驚きと感動を覚えました。村での夜はずっと世話をしてくれてきたチーフマネージャーのサレツさんから全員の生い立ちや子どもたちの今後の希望について深夜まで聞き取り調査をしました。

教育支援の継続を

さて、今回の調査の結果、私たちが1999年に建設し運営に参加したチャイルドケア・センターは当初の目的であったセンター自体の経済的自立が難しいことがわかりました。当初は2ヘクタールの農地を購入したり、豚の飼育、有機農法による野菜の栽培、CCN(コミュニティ協同組合)による運営など、経済的自立を目指し、努力を重ねてきました。

しかし、2003年秋から諸事情により子どもたちがバットバン、シエムリアップ、お寺と分かれて生活していることによる経費の増加、スタッフの不足などが加わり、NGOるしなの代表、松本氏はシエムリアップへの統合移転を子どもたちの将来にとって最良な策と考えていることがわかりました。センター移転にはまだ時が必要なこと、NGOるしなの活動の主軸がトンレサップ湖の違法漁業監視、漁業支援へ移っていること、プロジェクト自体が自立する可能性のある支援が地球の木の原則であることなども考慮して、カンボジアチームでは、話し合いを重ねてきました。その結果、2000年から2期6年(ほくぶランチ支援から8年)のチャイルドケア・センターの支援プロジェクトは終了しても良いのではないかと結論に達しました。幸い現在センターには、他団体の寄付も届いており、運営に支障はありませんが、現在在籍している子どもたちには、20歳をめどに独立できるように継続した支援が必要です。地球の木が担っている3名の子どもたちについては、責任を持って自立を支え見守っていかねばなりません。

2006年度以降は里親型支援、現地との交流企画(ツアー)に形を変えて登場する方向で検討中です。今後もカンボジアの情勢やクメールの文化紹介など折りに触れてお伝えしていきたいと思っています。

中国の若者から学ぶ「シンプルライフ」

昨年11月、24才の中国人の映画監督と知り合った。長身にまとうのは地味な上着と穴のあいたコール天のズボン。近代化された日本の都会の中で小津安二郎の世界の名残を探していた。そんな李君はこう言った。「僕は寮に引っ越す時、いらぬものをすべて処分した。これからは、欲しいと思うものがあっても、本当に必要でないものは買わないことにした。本は好きだが、読む時間がない。読める分だけ買うことにした。シンプルライフを5年間続けてみようと思う」

帰国の際、おみやげものをあげようと思ったが、予定を急ぎよ変更。箱根の美術館で求めた日本画の絵はがきの気に入ったものを数枚渡した。心に残る出会いだった。

(丸谷 土都子)





カンボジアの子どもに関するデータ

総人口	14,144,000人
18歳以下の人口	49.3%
5歳以下の人口	14.9%
HIV感染者/エイズ患者	
15~49歳	2.6パーセント
0~49歳	170,000人
0~14歳	7,300人
孤児の数 0~17歳(推計)	670,000人
孤児の就学率	71%



(ユニセフ世界子供白書 2005より)

「興味津津」はじめてのカンボジア

米林 大作

飛行機から眺めるシエムリアップは、11月の雨期あけ直後ということもあるのか水溜りが多いという印象だ。琵琶湖の役4.5倍というトンレ・サップ湖も、逆流するメコン川の水を貯え今は15倍に水ぶくれしているはず。朝のシエムリアップは爽やかだった。

市内に行くために国道6号線を走る。この沿道には建設中のもも含めホテルがやたら多い。この国道の改修工事には日本の政府開発援助（ODA）約14億円が使われている。現在のカンボジアは権力がますます集約され、汚職も増加しているといわれている。もともと東南アジアの人々は、日本と違い国家を強く意識してこなかったと思う。そこには国家に対して多くの援助が入ってくる。それを取り仕切る人がでてくる。アジアでは一族郎党をまず優遇してしまう。外から侵出する企業などにとっても、権力の集中は何かと都合がよい。カンボジアも「マルコス化」が進んでいるようだ。

子どもたちの生活

「チャイルドのケア」はどのようなものが理想的なのだろう。カンボジアは粗放ともいえるかもしれないが、チャイルドがチャイルドのケアをしてしまうような良さがある。それに比べ日本は親子が「ベツゴっこ化」しているように思える。現在のチャイルドケア・センターには19人（男13、女6）の子どもたちがいる。昨年、自活第1号としてコムレーン君（23才）がセンターを卒業した。彼は心臓が弱いのだが、シエムリアップのカフェで元気に働いていた。子どもたちはシエムリアップに女子を中心に7人。バットアンバンには地球の木が建設したセンターにも6人、町なかの「るしな」オフィスに高校生が2人、それと4つの寺に僧見習いと



ウェィターとして自立したコムレーン君

して4人。7ヶ所に別れ生活している。バットアンバンはカンボジアでも有名な穀倉地帯、お米が美味しい。私たちが夕暮れにセンターに到着すると、センターの大きな子どもたちが簡易田船で刈った稲を運んでいるところだった。子どもたちの中には学校に行くより農作業が好きな子もいる。しかし将来の職業として農業は現金収入になりにくいとのこと。たまたまカンボジアに生まれ、いろいろな境遇を持つことになってしまった子どもたちだが、たくましく成長してほしい。



簡易田舟

興味深いクメール民話

チーム手持ちのクメール民話絵本のストーリー調べも私の担当だった。その本にはウサギとワニが描かれている。高橋宏明編「カンボジアの民話世界」によると、クメール民話ではウサギ、ワニ、トラ、オオカミ、ヘビ、カラス、スズメなどの動物がよく登場する。そのなかでもウサギは登場頻度が高く「知恵者」として人間を助けたり「いたずら者」にもなるとのこと。ワニは「恩を仇で返す」悪役。また民話では「村＝文明・知性、森＝野蛮・無知」の対比が多いという。お隣のラオスの人々の民話ではどうだろう。興味が沸いてきた。

*詳しい調査報告は調査報告集が出来上がっておりますので事務局にお問い合わせください。

カンボジア調査報告会

日時：3月16日(木) 10:30~12:00
場所：大倉山地区館
参加費：300円（資料代、お茶付き）



家族型農業を実践しているシアソンの家族

今回は、まずたいへん悲しい事を報告しなければなりません。

私たちがネグロスに出発する直前、1月8日に現地NGO・PAP21の代表ベン神父が急逝されました。今回のツアーでは、日本とネグロスのお母さん交流として、ベン神父の教会で消費者であるお母さんたちと話したいと思っていました。それが実現できなかったことは残念ですが、ベン神父の葬儀にたまたま、日本から代表のように出席することができました。

ベン神父は、1944年ネグロス島の向かいパナイ島の貧しい農家の長男（10人兄弟）として生まれ、とても成績優秀だったので、苦学しながらもハイスクールを卒業しました。そして貧しい人たちの現実を肌で感じながら神学校時代を過ごし、神父となってからはいつも貧しい人の側に立って考え、70年代には、ネグロス各地に生まれたキリスト教基礎共同体運動の中心となって10年間カンラオン火山の山の中で活動し、貧しい民衆のために行動してきた人でした。彼は、ネグロス島の砂糖キビ労働者の置かれた特殊な環境をよく理解し、土地闘争や、その後の農民として自立していくためのPAPでのプログラムを推し進めていたかけがえのないリーダーでした。この成果を見ないで逝ってしまったベン神父は無念でしょうが、この遺志は多くの方が継いでいってくれることでしょう。

今回、家族農業のインタビューで、シアソンの3家族を訪ねました。ようやく自分の土地になった元砂糖キビ農地で過酷な野菜作りに挑戦しています。彼らの耕作地は、平地ではなく、農業には不可欠な水は簡単には手に入れない状況にはありますが、まじめに一生懸命、家族で頑張っています。

1年ぶりにネグロスを訪れ、町はどんどんおしゃれになり、急速に経済格差が広がっているのを感じました。日本のODAによる、シライ国際空港の建設が2007年の完成を目指していることも一因かもしれません。次号でまた報告いたします。

(副理事長 広瀬 康代)

初めてのネグロス訪問

1/13~1/19

地域流通 として 地産地消

飛行機は行きも帰りも満員。これだけフィリピンの人たち（女性が多い）が大きな荷物とともに日本を来しているのに私たちは日本で知り合いになる事はあまりない。
*大橋さんによれば彼女たちの日本語がちよっと下品な男言葉になっているらしい。普通に女性と交流することが少ないのか。思い当たる節あり。胸が痛い。

初めてのネグロス、頭に思い出される事をまずあげてみよう。

犬、鶏、子どもがどこにでもたくさん、自由に生息。やはり、サトウキビ、バナナの島だった。それにしても広大なサトウキビ畑。

自立、独立した農民になるための激しく長い闘争の歴史や、支持・支援に集まった人たちとの改革のための努力。その力づよさに感動。

市場に並ぶその日その日の命の糧である魚、肉、野菜、米など。買い込むというより必要な分だけ買う、売るというスタイルで地域流通が成り立っている。地産地消はあたりまえ、食生活の原点か。

大橋さんのかゆいところに手の届く通訳および解説のおかげで、外国にいるという壁をほとんど感じることなくいろんな人たちと出会えた。ラム酒やマルガリータをなめながらのミッドナイトトーク、これからグローバリゼーションの波をどう乗り越えられるか、日本の私たちにもネグロスの人たちにも共通の課題だ。暮らしや文化を通じた人の交流、連帯フォーラムの実現を望む。

(西湘ランチ 大嶋 朝香)

* : JCNC (日本ネグロスキャンペーン委員会) の現地駐在員



大橋さんご夫妻と共に

いろいろ格差はあるけれど…

出発の朝、寒中夏服の上にカーディガン、コート、カイロを背中にしよって成田へ。空港ではチェックインの列に大勢の人がたくさんの荷物を持って並んでいるのにびっくり。フィリピンに帰る人たちのお土産がカップラーメンというのも驚きでした。マニラ空港で国内便に乗り換えてバコロドへ。英語をほとんど話せない二人と少し話せる一人の三人でまごつきながらの移動は少しスリルのあるものでした。

ネグロスではツプラン農場、オルタ・トレード社、エスペランサ、バランゴン生産者組合、カネシゲ・ファーム、そして小さな村々を訪問。訪問先の女性たちは希望と意欲があり、将来のことを自信を持って話してくれました。

そしてツアー中、バコロドの町を何度も通過しながら町の様子を見てきました。新しい空港の工事と韓国企業。近くにできつつある高級住宅地と港を取り巻いているスラム化した町。庶民的な市場と高級モール。故ベン神父を取り巻いていた人たちが集まると、すぐギターを囲んでの歌。子どもたちの明るい顔と地域がお互いに助け合っているという様子。いろいろな落差と共に人間関係の濃密さを感じた1週間でした。

(西湘ランチ 坂下まさみ)

森の精霊たちとの会話

12月のある晴れた日のこと、JVCの対象村であるナポー村で、年1、2回行われる森の精霊を祭る儀式が行われた。まだ朝のひんやりした空気が、あたりを包んでいる頃、村人がめいめい奉納のための鶏と米と酒を持って、ぞろぞろ集まってきた。30分もしないうちに老若男女、そして子どもたちで埋め尽くされ、いつも静かな精霊の森はいつになく熱気を帯びている。

長老や村の上役たちが儀礼の祭壇を作るその傍らで、茹でてぎゅっとしまった鶏の足を持った家長たちが真剣な面持ちで、祈祷師のもとにつぎつぎにやってくる。みな、来年の豊作や家族の幸せを占ってもらっているのだ。すでに祭壇付近には、あふれんばかりの鶏と米と酒が置かれており、また、森の精霊に捧げるためのつぼ酒（ラオハイ）が並べられている。

わいわいがやがやした雰囲気の中、祭壇とラオハイにろうそくを灯し、祈祷師や長老たちが祈りの言葉を唱え始める。そして、森の精霊に飲んでもらうために、水牛の角を使ってラオハイの中に水を注ぎ続ける。ラオハイの中のお酒はあふれるどころか、心なしか減っているようにすら感じる。

この儀式を通じて、乾季の間に木を使うことの許しを乞い、また天候や米の収穫、家族についての運勢を占い、よりよき未来を祈願する。森への畏怖と敬意を示すこの儀式が続く限り、村の森は守られていくに違いない。

(JVCラオス事務所 名村 隆行)



たくさんのごちそうを前に森の妖精に祈りをささげているところ

カムアン県 森林保全・自然農業支援

支援はキャッチボール 2005年度ネパール調査に参加して

私たち地区の仲間とネパールとのつきあいが始まったのは、2000年にSOARSのニルマラさん、シユレスタさんが藤沢を訪れ、私たちの運営する「リサイクルショップひまわり」を視察したのがきっかけです。以来、カイルリ郡の学校建設などをお手伝いしてきました。そして2004年12月は「デイスペースひまわり」の厨房で働く6人が「やっぱり、見て、体験してみないと解らないね」とスタディツアーに参加。その時見てびっくりしたのは、宿泊した人材育成センターの台所。ガスコンロもまな板も床に置いて調理していることでした。そこで調理スペースを高くすることを提案。床からの雑菌の跳ね上がり予防、腰痛対策、調理台の下の部分に物が整理できるという3つの利点があることを伝えてきました。

今回、10月末に再び人材育成センターを訪れ、またびっくり。私たちの意見が取り入れられ調理台をわざわざ作ってもらったのだという話を聞き、とても嬉しく思いました。普段気がつかないようなこんな小さな事にも、教えたり教えられたりが実現するのは、地球の木の活動がこれまで作ってきた人と人との信頼関係があればこそと再確認する思いがしました。もうひとつ、イマドール村の元気なユースクラブの活動を見て、将来の夢に向かって一生懸命に考え、行動している姿にも感動して帰って来ました。

(ネパールチーム 堀 千鶴)

女性のための教育支援

ラオス発

「自営業」の輝き

ラオスの首都、ピエンチャンは小さな町だ。食堂はそれぞれが「自営業」であり、いわゆるチェーン店は存在しない。家族経営で、お父さん、お母さん、おばあちゃんに息子に娘、似た顔が並んで朝からせせと働いている。麺類屋が多いが、だいたいメニュー数は少なく、値段も安い。儲けることよりも、おなじみのお客さんのためにがんばっている、という使命感を感じる。ほったて小屋みたいな店でも味さえよければ、ネクタイやハイヒールのオフィス族が車で乗りつける。そんな小さな店が、ある日、隣に白い壁の立派な店を建てて引っ越ししたりすると、感動する。家族で額に汗して労働して、店を拡張する。なんと目に見える成果だろう。

いっぽう、現代の日本はどうだろう。町が「チェーン店一色」に見える。もちろん自営業でがんばっている方もいると思うが、割合的には少数になってしまった。そしてニート問題。「どこかの組織・会社に所属しなければいけない」という圧迫感。戦後、「家業を継ぐ」ことよりも「会社に勤める」ことのほうが「成功」のようにみえた時代があったのだろう。時代変わって今、「家業を継ぐ」という選択肢がもっとあったなら、若者も「どこかに就職」「採用してもらおう」という強迫観念から開放され、落ち着いて自分のペースで労働する人生を選べるのではないか、と思う。とはいえ、「家業」「自営業」がどんどん減ってしまう日本。流れを変えるのは難しい。

名村 雅代 (在ラオス)





フランチから

1/21 大雪の中、ネパール調査報告会を開きました 湘南フランチ

ネパール報告会の前夜から次々入る参加申し込みのキャンセル電話。あー何ということ！ ぼたん雪が舞う純白の雪景色の中をおっかなびっくりカレーのお鍋とおひつを運び込んだ会場に、それでも7人の参加者があった。



初めて着たサリーにウキウキ

報告者の熱い語りの後、堀さんが持参してくれた色鮮やかなサリーを着付けてもらう。初めてのサリー姿に少しばかり、気恥ずかしくも、心うきたつひとときでした。

(湘南フランチ 國分純子)

カーストによる身分・貧富の差など、知識としては知っていましたが、今回、ネパール極西部の暮らしに関する様々な体験・状況をお聴きして、その自分を取り巻く環境とのあまりの差異に、改めて驚かされました。

女性への識字教育・職業訓練は、女性自身や村全体にとってとても重要ですが、孤立した村すべてに同じ援助をすることは困難とのこと。その問題

に対して、まずモデルとなる村をつくり周囲への波及を図ろうというように、一つひとつを着実に援助していこうとする皆様の姿勢が、現場の方々にとって心強い支えとなっているのを感じました。

(湘南フランチ S.K.)

地球の木は、「KOREA子どもキャンペーン」と「南北코리아と日本のともだち展」実行委員会に参加し、市民の立場から日本と朝鮮半島の平和と友好を進める活動をしています。

太陽光がつなぐ心と心

丸谷士都子

平壤市郊外のテガン協同農場を11月に初めて訪問した。今回の訪問は、KOREA子どもキャンペーンが2001年設置した太陽光発電機の修理のためだった。前夜から泊まり込んで原因の究明に当たっていた国家科学院の技師、ホ・ヨンジンさんによると、バッテリーの寿命切れとインバーターの故障が原因だそうだ。部品の交換・修理をお願いしてきた。現地の電力事情はかなり厳しいので、太陽光発電機はとても貴重だ。大切に使ってくれているのがわかった。これで厳しい冬を前に、子どもたちが再び暖かい部屋で遊ぶことができると、ひと安心。

親しい友達のように私たちを迎えてくれたのは、託児



心づくしのおやつに心も温かくなって…
平壤・託児所にて

所のリョ・チョンヒ所長と幼稚園のキム・グムシル園長さん。どこかで見た顔。そう、近所の友だちそっくり。初対面とは思えない。修理の後、案内された部屋には、心づくしのおやつがずらりと並んでいた。焼き芋、おもち、お団子、パン、りんご、ニンニクみそ。所長さんの手作りだ。筒井さんと私2人だけの訪問ということで、国際女性デーにおこなうという運動会や家族の話題に

女同士のおしゃべりが弾んだ。KOREA子どもキャンペーンがこの農場を訪問したのはすでに10回を超えるという。北朝鮮と日本の間には未解決の問題が山積しているが、太陽光という平和のシンボルを通じた継続的な交流は、確実に人の心をつないでいると感じた。

「南北코리아と日本のともだち展(絵画展)」(12月8日~11日ソウルにて開催)に参加して

鄭明珠(ちよん・みよんじゅ) 東京朝鮮第五初中級学校 5年



わたしはソウル訪問中、楽しかったことがたくさんありました。最初の日に良かったことは、いっしょに行った日本の人たちと友だちになった事です。私は友だちになれたらいいなと思って

いました。それで心がわくわくしました。

2日目のソンパ小学校での交流も楽しかったです。民俗遊びは私の学校でもよくやる遊びですが、ソウルや日本の友だちといっしょに民俗遊びができて楽しかったです。給食の時間に「からい」と言ったらみんなが一人ずつコ

ップに水を入れて持ってきてくれたので、なんてやさしいんだろうと思いました。

その日の夕方絵画展に参加しました。いろんな作品を見ながら絵をとおしている人々と出会え、いっしょに遊んでいるような気がしました。幸せな気分になりました。

3日目のワークショップでジェスチャーゲームをした時、言葉は通じなくても体を動かす事で楽しくわかりあえたのがうれしかったです。楽しくてたくさん笑いました。平和はこんなものなんだとわかった気がしました。



地球の木コースクラブに入って

知花 美和

私が、この地球の木を知ったきっかけは、高校からの友人(大竹洋子さん)と一緒に地球の木コースクラブの学習会に参加してみないかと誘われ、去年の春に参加した事がきっかけでした。参加してみると、世界の事について自分の知らないことがいっぱいあり、自分たちに出来ることは何なのかと考えさせられ、とても勉強になり、充実した時間を過ごせたと感じました。「世界の困っている人たちのために何かしたい」とただ漠然と考えていた私は、ここでなら何かできるかもしれないと感じ、コースクラブに入りました。

コースの活動を通して、私が一番感じることは、自分の無知さです。世界について分かっているようで、何も分かっていないという事を痛感し、その思いが「もっと色々な事を知りたい」という思いになって現在コースのメンバーと楽しく活動しています。毎回毎回、コースの学習会に参加するたびに、それぞれの色々な意見や考え方を聞くことで、狭かった視野も広がっています。十人いれば、十人の見方があり、一人では見えなかった面も発見することができ、年齢も境遇も違う人たちが集まって何かをするという事は、良い意味で刺激しあえ、とても成長していけるすばらしい場であると思います。今の私は、まだ小さな芽が出てきた段階かもしれませんが、少しずつ色々な事を通し、成長し葉っぱをいっぱいつける誰かの役に立つ木になっていきたいです。

地球の木コースクラブは、毎月1回横浜駅西口から徒歩5分の所にある、かながわ県民活動サポートセンターで学習会を開いています。

若い方の参加をお待ちしています。
お問い合わせは事務局までご連絡ください。



世界経済の不公平さとトービン税

横川 芳江

1月末の朝日新聞の夕刊に「所得の差、NY州で8倍超す」という記事が載りました。米国に限らず、全世界で富裕層と貧困層の格差が拡大し続けています。最も豊かな国と最も貧しい国の所得の差は、60年の30対1から、90年には60対1に、2000年には103対1に拡大しています(「人間開発報告書」)。

これには様々な原因が考えられますが、現在の経済システムが自由競争に基づき、より資本の大きいものに有利になっていることも挙げられます。地球上では今、巨大な「お金」が動いています。私たちが日常使っている目に見える「お金」や経済活動に伴う「お金」ではなく、金融や投機的な取引に使われる資本としての「お金」です。

94年のメキシコ通貨危機や97年のアジア通貨危機では、巨大資本が途上国で投機的な為替取引を行ない、そのため通貨が暴落し、経済が破綻するという事態が起きました。巨大な企業や金融資本は、世界の金融市場間を移動して短期的な投機を繰り返し、莫大な富を得ています。一方投機された国では経済が破壊され、国家財政は破綻、企業の倒産、貧困の拡大を招くことにもなります。私たちの運命が、ごく少数の国際金融資本家の手に握られてしまっています。

このような経済システムに歯止めをかけるものとして「トービン税」と言う為替取引税が見直されています。これは、ジェームズ・トービン(米国の経済学者・ノーベル賞受賞)が、72年に提唱したもので、国際間の為替取引に低率の税を課して、短期の投機的取引を減らし、税収は貧困削減や環境保護に分配するというものです。04年8月ベルギーでトービン税法が採択されました。EU(ヨーロッパ連合)でも議論されています。

税収の再配分を誰が、どうするかなど多くの問題がありますが、今後、さらに研究と議論を進めていく必要があります。何らかの有効な手を打ち、地球上のすべての人たちが「公正で平和」に生きる社会を作りたいですね。

活動報告(12月~2月抜粋)

- 12月 1日 第8回理事会
- 5日 「マジカルシュガー」教材作成ミーティング
- 7日 ブランチ連絡会 横浜華僑婦人会交流会
- 8日~11日 南北コリアと日本のともだち展(ソウル)
- 10日 ネパール調査報告会(事務所)
- 14日 第6回コースクラブ学習会
- 17日 オルタ館フェスタ参加
- 21日 オープンオフィス・地球の木カフェ
- 27日 大掃除
- 1月 10日 第9回理事会
- 13日 生活クラブ新年会参加
- 13日~19日 ネグロス島お母さんツアー
- 17日 NGO共同キャンペーン実行委員会(JANIC)
- 18日 「もっと身近に北朝鮮」JVC講座
- 21日 ネパール調査報告会(湘南ランチ・茅ヶ崎)
- 「かわさき市民アカデミー」受講生事務所訪問
- 22日 つるみ国際交流まつり(とうぶランチ)
- 23日 マジカルシュガー教材作成ミーティング
- 24日 EARTHIANスタッフ事務所訪問
- 29日 ネパールツアー事前学習会 I
- 30日 第7回コースクラブ学習会
- 31日 北朝鮮報告会(事務所)
- 2月 1日 第10回理事会
- 4日 「ネパールタルー家族ゲーム」(なんぶランチ 杉田小学校)
- ブランチ連絡会(杉田小学校)
- ネパールスタディツアー事前学習会 II
- 5日 ぶっとびアジアワークショップ(杉田地区センター)
- 10日 足立区立第4中学校生徒事務所訪問
- 11日~19日 ラオスタディツアー
- 12日~19日 ネパールYOUTH交流スタディツアー
- 17日 出前講座(県立有馬高校)
- 18日 パキスタン地震現地報告会(スペースオルタ)
- 24日 マジカルバナナ出前講座(三鷹市地球市民講座)
- 26日 みどり多文化フェスタ(ラオスチーム)
- 湘南国際交流ラウンジ祭り(なんぶランチ)
- ファンキー・キッズ(ネパールチーム・コースクラブ)

第7回地球の木総会のお知らせ

日 時：5月20日(土) 13:00~17:00
 場 所：オルタリアン(オルタナティブ生活館2F)
 (新横浜駅徒歩7分)
 2006年、地球の木は設立15周年を迎えます。多くの
 方のご出席をお待ちしております。(詳しくは同封のお
 知らせをご覧ください)

ネパールYOUTH交流スタディツアー報告会 ~輝く瞳の若者たちと語り合った!~

日 時：3月21日(火・祝) 13:30~15:30
 場 所：かながわ県民活動サポートセンター708号室
 (横浜駅西口徒歩5分)

参加費：300円(資料代)
 申し込み：地球の木事務局
 2/12~2/19に、大学生5名がネパールのイマドール村
 を訪問しました。住んでいる村をよりよくするための活
 動をするイマドールのユースクラブ、極西部のユースた
 ちも交えた交流は、日本の学生たちにどんなインパクト
 を与えたのでしょうか。そのときの様子を、豊富な写真を
 交えてお伝えします。

アジアフェア期末セール 地球の木カフェ ~買って食べてボランティア~

日 時：3月28日(火) 11:00~18:00
 場 所：地球の木事務局
 (関内駅南口徒歩1分・教育文化センター隣)
 今回の地球の木カフェは、アジアグッズの期末セー
 ル!在庫も出して賑やか、お得に販売します。50~70
 %OFF!の物もあります。見逃せません。カフェ恒例の
 地球の木カレーや手作りお菓子もお楽しみに。(詳しく
 は同封のチラシをご覧ください)



あーすフェスタかながわ2006 みんなで育てる多文化共生

日 時：6月3日(土)・4日(日)
 場 所：あーすぶらざ(JR本郷台駅そば)
 世界のおどり、あそび、料理セミナーなど、神奈川に
 住む外国籍の人たちと繰りひろげる楽しいお祭りに、地
 球の木も参加します。

ホワイトバンドご購入 ありがとうございました

販売本数約850本。収益は地球の木プロジェクトのカ
 ンボジア・チャイルドケア・センター支援に使わせてい
 たいただきます。引き続きホワイトバンドを身につけて、「貧
 困を生み出すしくみ」を変えようとアピールしましょう。

地球の木カレンダー今年度もありがとう

アジアからの平和への願いを込めた2006年版地球の
 木カレンダー「Monsoon ASIA」。たくさんの方々に
 購入・販売のご協力をいただき、ありがとうございました。
 販売部数は1,264部でした。収益は地球の木の各支
 援地プロジェクトに使わせていただきます。

募金・寄付ありがとうございました

募 金 (2005年4月1日~2006年2月20日現在)
 総額 5,497,662円
 パキスタン地震被災者救援：5,112,567円
 スマトラ沖地震被災者支援：118,095円
 カンボジア：1,000円/フィリピン：1,000円
 ラオス：113,500円/ネパール：137,500円
 指定なし：14,000円

募金者リスト(敬称略)

生活クラブ 生協神奈川 Tea&Talk 青木和枝 青島典子 青山晴代 赤谷文子 浅間桃子 阿部 忍 新開一成 有村順子 池田千佳子 稲垣薬品興 業株式会社 井上喜美子 上野ひろみ 植野道子 榎本志津子 遠藤嘉子 大坪博男 大森正子 小河原真理 小野寺玉江 柏柳明子 柏柳妙 片木康子 片倉恵子 片山義 加藤美智子 金城初枝 金田美知子 川上博美	川崎市民アカ デミー受講生 川崎ランチ 木内 京子 木村三千代 桐原加代子 ケネスクボ 小市育世 斎藤和子 斉藤 敏 酒井 緑 坂下まさみ 酒田常子 佐々木慧子 三方泰子 塩入真知子 軸丸三喜子 島村祥子 島本陽子 庄司富士子 乗松寿代 末吉悦子 杉浦千代子 鈴木敦子 鈴木修子 鈴木登志子 鈴木美智子 鈴木玲子 曾根洋子 杉木京子 染谷方子 高島淑子	高橋雅枝 高橋百合子 高橋礼子 田代良子 田中いく子 田中八重子 田端弥生・久勝 田村良夫 丹澤厚子 ちえのわハウ ス「春待ちコ ンサート」PJ 出川さとみ 寺田悦子 土井瑠璃子 唐見純子 徳永ひろみ 栃内まゆみ 内藤博子 仲 慎 二 郎 中嶋洋子 中野 薫 中村恵子 中村久子・雅子 西 信 子 西村明夫 乳井京子 沼田由美子 花井遵行 浜辺美英子 半澤弥榮子 肥後悦子	藤井郁子 藤木昌子藤 田 晴 美 藤本直美 藤原馨子 古性 和 子 星 恵 美 子 保住正道 細井真理子 本田まり子 前島友子 牧野 昌子 松田澄子 松本 恩 松本久美子 三浦多佳子 三橋洋子 三宅なほみ 三輪 眞 弓 向井しづ 村本文美子 森 田 敬 子 森谷八重子 八 鍬 ス ミ 柳田恵子 山田千枝子 山本通子 吉井多佳子 リサイクル ひまわり 若林かをる ウィルソン・ハザー
--	---	---	--

寄付(2005年4月1日~2006年2月20日現在)

総額：786,650円
 カンボジア：53,393円/フィリピン：232,779円
 ラオス：3,200円/ネパール：279,260円
 指定なし：218,018円

寄付者リスト(敬称略)

Tea&Talk 青木由紀子 赤木京子 植田 泉 遠藤富貴子 小野京子 小野沢春子 柏柳明子 小島梅子	川井道子 木村涼子 久保廣晃 小島梅子 菅まり子 鈴木修子 外山節子 清澤伸子 高宮春香 乳井京子	林 松子 原崎 絢子 春木由紀子 原田和子 東川由薫 船矢佳子ほ くぶランチ 松本かほる 宮川季子 武藤玲子	安田恵子 山本登志子 横川芳江 横浜市立平楽 中学校生徒の 皆 さ ん リサイクル ひまわり ファイバリー サイクル泉谷
---	--	---	---



地球の木サロンがオープンします

関内駅南口より徒歩1分という便の良い所にある事
 務所を利用して、少人数で楽しく学び、語りあう場と
 して、地球の木サロンを開講いたします。詳細は同封
 のちらしをご覧ください。

★ボランティア募集!
 発送作業、イベント手伝いなど

R100
 この印刷物は古紙配合率100%
 再生紙を使用しています

PRINTED WITH
 SOY INK™
 環境に配慮した「大豆インク」を
 使用しています